

日本の仏教学は欧米の研究者が日本語でなされた研究を参照する唯一の人文学の分野であった。近代以前の学問を踏まえ、仏教学は近代以降に欧米の影響を受けたため、基礎的研究として重視されている。しかし近年は日本語でなされた仏教研究に対しての需用は世界的に低下しつつある。そのような現状を鑑みて、日本語の論文が人文学に対してどのように世界的に貢献できるかについて考察してみたい。

人文学の意義は人間として普遍的な課題を扱うことにあり、人文学の一分野である仏教学が必要とされるかどうかは普遍的な課題を扱っているにかかっている。研究者だけを対象として行う研究が過度に進行して、研究者が断片的な課題を扱うのでは趣味の域を超えず、過去の遺産に寄生しているに過ぎない。

発表では最初に発表者が大学で担当する初歩的導入授業の体験を踏まえ、口語の表現や難解な言い回しを論文で避けるべきことを論じる。また日本語の「が」が多用される背景について考察し、日本語全般に文章と文章の論理的接続が分かりにくいことを論じる。

第二に最近のテクノロジーによって、可能になりつつある点を取りあげる。自動翻訳はかつてのイメージをくつがえし、2016 年ごろからビッグデータを用いて急速に発達した。Google translation は今後、中級程度の語学能力を超えていく。また専門用語についても近日中に対応可能であろう。現在論文は実質的に pdf 化されている。自動読み取りソフトにより、欧文については相当正確にテキスト化できる。自分の論文を pdf ファイルで academia.edu で公開している研究者も多い。自動翻訳の利用は今後研究分野で必須となる。自動翻訳を前提とした日本語の論文の発表形態が必要とされるだろう。

一方で全てが自動翻訳可能ではない。異文化・異言語においてニュアンスの異なる語彙や言い回しを考察することが次の課題となるであろう。

テキスト修正機能を用いた画像の共有が可能な Skype などのビデオ通話により、世界で離れた場所においても一緒に文献を読解をすることが可能となった。母国語でない言語で研究発表するのは、望ましいことであるものの、環境によっては容易ではない。母国語を異にしながらかつて他言語を学んだものたちが共同で時間をかけて現代語への翻訳を通じて、上記のニュアンスの異なる語彙について深く考察することが有意義であろう。

最後に論文公開形態について考察する。商業出版社から刊行する著書は著作権の点から pdf 公開に限界がある。大学に関係する出版社で販売も pdf も公開可能にしているのが今後のモデルとなる。

日本の出版社の価値は尊重するとして、売れ行きが思わしくないことから出版社は論文集を刊行することに二の足を踏んでいる。発表者が日本語による論文集を刊行した体験を踏まえると、400 部程度の論文集を印刷し、主要な学術機関と研究者に郵送を行うことが有用と考える。発表では予算についても考察する。国際間の交流を踏まえ、普遍的な課題を扱った論文集を刊行することが意義あろう。(1215 字)

キーワード：人文学の課題、自動翻訳、論文集の刊行